

空想!?

# 戦国岩石城復元絵図

## 岩石城【がんじやくじょう】

1158年～1615年

保元3(1158)年、平清盛が大庭景親に命じて築かせた岩石城は、中世の山城として数奇な運命をたどりました。元和元(1615)年の「一国一城令」により廃城となるまでの457年間、菊池氏、大友氏、大内氏、秋月氏などに攻められ、幾度となく城主を変えながらも、豊前一の堅城として重要な戦略拠点であり続けました。



※拵手(からめて)=城や砦(とりで)の裏門。(⇔大手)

岩石城とはいったいどんな城だったのでしょうか。麓から眺めれば左右に裾野を広げる美しい山ですが、いざ山中に入ると急峻な山裾には花崗岩の巨石が立ちはだかり、複雑に入り組む尾根と谷は深い断崖を形り、山頂への侵入は容易ではありません。まさに自然の要塞です。水も豊富にあり、築城にこだわりを持つ細川忠興(小倉藩初代藩主)も「百人兵を置けば十万の兵も防げるとたたえたほど。」

しかし、その当時の建物などの詳細を知る記録はほとんどありません。あるのは崩された石垣と、瓦の破片、いたるところに造られた堀切りや柱穴など…。これらを元に、天正15年4月、秀吉軍による岩石城攻めをイメージして当時の城の姿を思い描いてみました。

本丸や天守台にあるのは簡素な木造の館。石垣は「野面積み」という、自然の石をそのまま積む方法で、上から石を落とす目的があったといえます。城の周囲には「逆茂木」という樹木の先端を尖らせ敵に向けて置く防衛用の柵を配置。また城内には牛や馬も飼われ、戦いでは牛馬をつなぎ合わせ、尾に松明をつけて追いつ下したという話もあります。山上には馬ばかりでなく牛もいたとは驚きです。

当時、秋月氏が支配していた岩石城を守るのは、大手(添田側)に芥田悪六兵衛、拵手(赤村側)に熊井越中守久重の兵力合わせて3千人。対して攻める秀吉軍は、大手に蒲生氏郷、拵手に前田利長、大将に羽柴秀勝の合わせて1万人。さらに鉄砲も大量にあります。

岩石城の城兵は果敢に戦いましたが、その日の夕方、秀吉の軍勢にたった一日で岩石城を攻め落とされてしまいました。

◎参考文献および引用:『岩石城』(添田町)